

～学生編 2～

現役学生が「東神大ならではの！」の授業の醍醐味、
学生生活の喜びを紹介します。

教会生活

学部3年生

井垣 しおん



教会学校の子どもと学ぶ井垣神学生

授業、チャペル礼拝、友人との交わり キャンパス生活のすべてが教会につながる。

東神大に入学すると、教会では神学生として奉仕することになります。教会員から神学生になって一番変わったことは、「受け身ではいられない」ということ。ついこの前の高校生までは御言葉を聴く側でしたが、神学生になったとたん神さまの言葉を発信する立場になったからです。また、いままで当たり前だと思っていたこと、例えば礼拝の形式やお祈りひとつをとっても、神学校でその神学的な意味を学び、より積極的に礼拝に関わる気持ちが強くなりました。

教会学校の教師にもなり、どうしたら子どもたちに伝わるか、子どもたちが聖書に親しむにはどうしたらよいかを日々考えています。私は絵を描くことが好きなので、紙芝居をつくったり、聖書のお話をするときイラストを添えたりといった工夫をしています。自分のタラントが生かされる喜びを感じるとともに、勝手な解釈にならないよう私自身が聖書をよく学び、よく祈り、神さまと日々向き合っ、整えられることの必要性も感じます。

東神大にはさまざまな経験を持つ幅広い年齢の学生がいて、いろんな刺激を受けます。授業やチャペル礼拝、祈禱会に加えて、友人や先輩との交わりなど、キャンパスの生活すべてが教会での礼拝、奉仕につながっている。だから「召命共同体」ですし、これが「神学校と教会は車の両輪」と言われていることなのだと思えます。

私の所属する教会には、若い世代の人たちがあまりいません。でも、高校生のときを振り返ると、周囲の友だちが心の奥で救いを求めていることを感じていました。どうしたら若い人たちが教会に足を向けてくれるのか、神学生仲間にも相談しながら、青年伝道に力を入れたいと思っています。

夏期伝道実習

大学院1年生

大橋 新



「香長伝道圏中高生キャンプ」で習字を用いたゲームを行った。後列左端が大橋神学生

実習先の伝道の熱意が、 今も背中を押し続けてくれる。

私は学部4年生の夏期伝道実習で、「香長伝道圏」に派遣されました。ここは高知県と徳島県にまたがる13の教会が伝道協力をしているエリアで、複数の教会を回りながら子どものキャンプに参加したり、家庭集会で献身の証しをお話したり、スケジュールはもりだくさん。説教は、同じテーマの説教を計7箇所の教会で行い、その都度牧師にアドバイスをいただいて改訂を重ねました。その結果、実習の最後に語った説教は、最初に準備したものとはまったくの別物になり、「ここまで深くなるのか」と自分でも驚きました。

そんな夏期伝道で感じたのは、なによりも「伝道することの楽しさ、喜び」です。それは、出会った先輩牧師の方々、教会員の皆さんの熱い伝道のスピリットに触れたからだだと思います。夏期伝で訪れた教会は、大きくても礼拝出席が20人ぐらい、小さいと5人ぐらいでしたが、それでも教会同士支え合い「香長伝道圏」全体で伝道するという機運がとても強いのが印象的でした。例えば、ある教会が伝道集会をするとなると、近隣の別教会の牧師たちも集まってチラシを配ります。また車で移動中、教会のない町に通るかかると牧師が「この町にいつか教会を建てたい。まずは家庭集会からはじめよう」といったビジョンをワクワクした様子で話されます。大学に戻ってからもその伝道の熱意に背中を押し続け、後期は授業や教会生活に、それまで以上に熱心に取り組みました。

私の夏期伝体験は一例にすぎません。楽しい毎日の中には、緊張したり、精神力、体力を使い果たすこともありましたが、でも、思い切って飛び込めば必ず「伝道の喜び」に触れることができます。これも神学生に与えられる大きな恵みだと思っています。